始

51
726

帝國圖書館藏

31-726

渡邊霞亭著

大正
7. 8 23
内交

山本久子刀自

山本久子自

序

余、母を傳して之を子孫の寶典とし將た一家の基本と爲さんとするの志あり、即ちろの起草を碧瑠璃園渡邊霞亭先生に囑す、先生快く諾きて此の一編を贈らる、母は尋常婦人の爲すべき事を爲し、尋常婦人の行ふべき事を行ひ來りしのみにて、四十年の生涯何等世に傳ふべき事蹟無しと雖も、我々兄弟に取りては

ろの尋常婦人の爲し旦つ行ふことを忠實に成し遂げられし母の勞苦を、衷心より感謝せざるべからざる地位にあり、夜半夢覺め万籟寂として靜かなる時、もし我母にして貧苦勞苦に志を挫きたまふ事ありしならんには、我々四人の兄弟は、目下如何なる境界にあるべきかを想ふたび、慄然としてろの深恩に感ぜざる無し、世間の婦人が誰しも勤むべき事を眞直に勤めて、微塵も他を顧み給はざりし母の生涯は、やがて我々の立てる家の基礎にして又我々の進み行く前途の光明なり、我々は母の深恩を感ずるたび、我が子女もまた母の如く、尋常婦人の爲し行ふことを眞直に勤めて子孫永久の基礎を作らんことを望むこと切なり、我々一門以外にして此の書を閲讀したまふ人々には余の微意の存する處を諒察せられ

んことを冀ひ、我家に生れたる者は、男女の區別なく、此の書に現はれたる母の生涯を則として、その埒外に逸せざらんことを祈る、是れ余が特に本書を印刷して、昵近者に頒布する主意なり、之をもつて序に代ゆ

大正七年六月、母が還暦の慶びに遭ひたる日

兒博一識

かなわとめ

波遣霞亭著

一

舛字形の門に續いた杉の生垣に、青葉若葉蒸すが如く繁つて、その茂みの間を可愛らしい小鳥が小鳴き渡る、梅と共に咲き出した白

玉椿が、咲いては散り、また散つては咲き、梅の枝には實が生つても、此にはまだ春の色が殘つて居る。

「お母樣、椿を折つても好いのでございますか」

久子は四歳であつた、赤糸の入つた奥縞の單衣を着て、桃色絹の細い帶をだらりと背後に結んで居る。

處々破れた古障子の間から、母の絹子の面が見えた、年齢は四十近からう、淋しい目に露を持つて、

「其樣無慈悲なことをする者ではありませんよ、切角咲いた花を無慘々々と折るのは、昆蟲や錦魚を殺すのも同じですよ、椿でも、梅でも、乃至は、牡丹でも、芍藥でも、年々美しい花を着けて、わたしや久子を慰めて呉

れますもの、其様無慈悲なことをして爲るものですか、花は歡んで見るもの、折つて玩具にするものではありません」と優しい聲で云ひ聞ける。

久子は沈と聞いて居た、苟に云はれた言も母の詞を聞き漏らさじと努める、そこに性來の好い素質が見えた。

「そんなら此處から見て居ます」

「爾う〳〵、優和しく見て在らつしやい、その内にお搔餅を燒いて進げますよ」

「お母さま、有難う」

久子は紀州侯の典醫立花玄深の一人娘であつた、玄深は奥勤めの醫師で、身分はさのみ好くないが、學問の造稽が深いのと、人格が高いのとで、上下の信用が可なりあつた、妻絹子との間に子がないので、然るべき家から

養ひ取らうかと相談して居る中、三十六歳で姙娠して、芽出度く産の紐を解いたは、安政五年六月十七日の事であつた、一家の歡びは譬うるに物がなかつた、久しく家の礎となり久しく人間の幸福を享けるようと、前途までを祝福して、久子といふ名を命けた。

久子は愛くるしい黒瞳勝の目を有つた小供であつた、日を經るに從つて父の面に酷く似

て來る。

「眞個にお父さんに熟く似て居らつしやるまるで瓜を二つに割つたようですね」と人々から云はれるたび、玄深の愛は深くなる。

「此子が切て十五六歳にでもなつたら、然るべき婿を迎へて、立花家を相續させよう」と常に思ふ、四十を過ぎて、初めて肉身の子を得たのであるから、愛情が一入深い。

然も玄深はさうした切な希望を抱いて、不圖した病氣から彼世へ去つた、それは久子が初めての誕生を祝つて程もない翌年の六月下旬であつた。

一家は燈火の消ねた如くになる、今の今まで皓々と清い光りを投げて居た月が、見る見る黒雲に包まれた如に思ふ、雲へ入つた月は再び現はれる時もあるが、一たん彼世へ去つ

た人は、何時まで經つても、還りたまふ時あるまじと思ひ至るたび、絹子は現世が滅びはしないかと悲む、まんぢりともせず泣き明す事は度々ある、天が明けると暗は消ねるが、絹子の心の暗は去ぬ。

「わたしも同じ道へ行きたい、わたしも一所に死んで了ひたい」

手許に刄があつたら、すぐ咽喉へ持つて行

きたく思つたが、良人が息を引き取るとき、痩せやつれた手で手頭を握つて、

「久子を頼む、どうか一人前に育て上げて好い婿を持たせて呉れ、他には何んの心殘りもないが、只それだけを頼んで置く」と云ひ置かれた詞を思ふと、爾うした弱い心を出してはならない、從來は良人といふ厚い壁に凭れて、久子を養育して來たが、凭れる物は忽

ち頽れた、壁もなく、塀も無く、垣も無い家の中で、單獨の力、單獨の意、單獨の愛で育て上げねばならぬ。

「しつかりとし無きやならない、今まで二本の柱で支えて來たのが、忽ち一本になつて了つた、その一本の柱に重い荷が積み重なるわたしの責任は容易でない、重い荷を双の肩に脊負つて、久子を養ひ育てなければならな

い、こゝで弱い心を出しては、家の基礎に龜裂が入る、良人の遺言が反古になる、良人は彼世へ旅立ちなされても、御先祖の血と魂とは頑是ない久子の身に傳はる久子を安全に育てるのは、倒れた柱を建てるに當る、同時に御先祖御代々々、良人の御菩提を吊ふに、此の上の供養はない」

斯うした自覺が絹子の胸に出て來たとき、

彼女の強い意志「石に嚙り付いても、久子を立派に育てゝ見せる」との負けじ魂が、心の奥底に基礎と置かれた。

徳川幕府の掟では、主人が死んで、相續の男子が決つて無い場合は、家名斷絶となるべきに極つて居た、然も玄深が病沒つて、後に相續の男子がない、久子はあつても女子である、女子で士分の家は繼がれぬ、即ち幕府の

掟に由つて、家名は斷絶し、扶持も、役料も召し上げられねばならなかつた。

良人には死別れる、その涙の乾かぬ間に、家は滅び、扶持は召し上げられる、さうした波瀾に漂はされて、手弱い女の生命が續かうか、と玄深の同僚は皆な同情した。

「此の場合、仕方が無い、お上に對しては恐れ多いが、爾うした例は間々あることぢや

當分は玄深殿を病氣と披露して、暫く喪を秘して置いちや何うか、その間に相續人となる小童を迎へるか、思はしい者が無かつたら、絹子さんに入婿をするか、何れとも好い方法が付くであらう、今家を取り潰されては、忽ち母子が路頭に迷ふ」

絹子が此の相談を受けたときは、何を考える餘裕も無かつた「何うか、其處を宜しく」

と挨拶した、その結果、習慣の如く披露された、玄深は位牌の主になつても、表面は病氣引きに屆けられて居た、何事にも形式さへ調へば、それで表面を糊塗して行つた幕府の末期は、これで總てが終んで行つた。

■□二□■

久子の家は和歌山の甚五兵衛町にあつた、

舛字形の門の内には、同心何某の家がもう一軒ある、絹子は萬事をこの家の主に相談して居た。

「なあ絹子さん、あなたもまだお若い、玄深さんが病沒られてから、もう足掛け三年になる、いつまでも病氣で通す理にも行くまいが、どうじや、入婚をなさらんか、町醫者の弟で、年齢頃も格好な人があるがのう」

何がしは絹子の前途を思ふので、時々斯うした相談を齎せる、けれど絹子は耳も貸さなかつた。

「何うございませうとも、わたくしは二人の良人を持ちません」

その詞に骨があつた、鐵石よりも堅い心の響きが、清しい聲の端に出る。

「あなたの御氣性では、爾う被仰るに無理

もない、然し、久子さんの前途も考へてお進げなさらなければなりません、もし玄深さんの病沒つた事が表面になつたら、明日から御扶持にお離れなさる、その時幼兒を抱へて、あなた何うしてやつてお行でなさる意ぢや、昔の常盤御前は操を捨てゝ家を立てたといふぢやないか、よく考えなさい」

「いゝ、わたくしに考へる點はございませ

ん、わたくしの心は定つて居ります、昔の人は何樣事を致しましても、その眞似は致したくございません、もし御扶持に離れましたら賃仕事をしてゞも、久子は一人前にして見せます」

絹子はいつもきつぱりと返事する、隣の何がしはそれにも懲りず、機會を見ては勸誘に來る。

「然し、女の手一つで、小供一人育て上げるには、隨分骨が折れますぞ、惡いことは云ひません、今の中に相續人をお極めなさい、それで無いときつと後悔を爲さる時があります」

「何事の後悔よりも、二度の良人を持つたときの後悔が深いだらうと存じます、どうかもう其の事は被仰つて下さいますな」

隣の主人は、不安らしい態度を見せる、それは絹子の頭へ近い將來に落ちて來る運命の恐しさを知つて居るからであつた。

「世の中も段々騒しくなつて、いつ合戰が始まるかも知れぬ間に、女子ばかりの御家族では、何うなさる事も爲きまい、さりとてあなたが夫ほどに被仰るのを無理にとは勸められない、然し、まだお考ねなさる餘地があり

ませう、大事の處ぢや、熟く考ねて御覽なさい」

斯う釘を刺すように云つて皈る事が度々あるされど絹子の心は玉である、假令碎ける時はあつても、色に染まる時はなかつた。

時は恰ど元治元年で、世間は攘夷の說や、開港の議が志士國士の口に上つて、徳川三百年の太平に龜裂が入るべく騒動して居た、殊

に毛利敬親公父子が、勅勘を蒙つて本國へ歸つてから、長州武士の悲憤となり、德川幕府の激怒となり、今にも長州征伐の大軍が中國の天地を震撼しようとして居たから、その餘波は何處の城内にも及んで居る、紀州家は三家であり、前將軍をその家から出して居た特別の關係があるので、一藩擧つて宗家に忠節を盡すべきであるが、夫でも家中には多少の

議論があつた、中には激越な議を立てる者もある、「全体此の後が何樣に爲るだらう」との危懼が誰の胸にも起る。

さうした大問題の復雜した間にも、針の穴ほど小さい事務が處理される、幕府の根底が動くにつれて、その親藩たる紀州家にもまた國祖以來曾て覺ぬ大動搖が來て居るのに、小役人は楊枝の頭で重箱の隅をせゝつて、小

さい勤務に忠を見せて居た。

「立花玄深は疾に病死して居るでないか」

上役の遠い耳へ、やつと玄深の訃が聞こゐた、玄深の死を秘して居た心切な元の同僚は初めて聞いたような面をして、

「はて、其様筈はありませんが、兎も角一應聞き糺して參りませう」と巧に跋を合はせて置く。

「よく調べて呉れさつせへ、もし左様な事があると、手前共の落度に相成る」

心切な同僚は、すぐ絹子の許へ駈け付けた

「もう可けない、どうぢや、相續人が定つたか」

絹子は糸を紡いで居た、手づから糸を紡ぎ手づから機を織つて、久子の爲めに新らしい衣服を作るのが、淋しく心細い生活の間に有

つ唯一の樂みであつた。

「まだ極めてはございません」

「夫では困る、今日まで巧く秘して來たが

とう〳〵上役衆の耳へ入つた、此の上秘し立

を致す事は爲きまいから、實際を申し上げな

きやならん、すれば當家は斷絶ちや」

「是非ない運命と諦めます」

「諦めるのは早い、何處かに格好な養子は

ないか、久子どのがあるのだから、將來夫婦

にすれば立派に家名が立つでないか」

「夫がどうも思ふような小供がございませ

んので、つい延引になりました、それにまだ

久子は四歳になつたばかりでございますので

……」

「今は四歳でも、十年經てば十四歳になる

十年位は直き經つよ」

「どうも此ならと思ふのがございません」
「無い事があるものか、男兒でさへあれば好いのぢや、五十五万石の御家中に、一人や二人の養子が無くて何うします、すぐお探しなさい、少し位は不足な點があつても可からう」
「いゐ、爾うは爲りません」
「其邊は後で何うとも都合が付く、もし格

好な小供が無かつたら、あなたへ入婚を爲すつても可いぢやないか」
「あなたまでが其樣事を被仰つては困ります、わたくしは玄深の妻でございます、玄深は病沒りましても、位牌はちやんと殘つて居ります」
絹子は何物も胃すことの爲きぬ眞面目な態度を持つて云つた。

「相變らずお堅いのう」

「わたくし獨身ではございません、久子の敎育を致さねばならぬ身で、道に外れた事を致すことが爲できませうか、假へ家は絶ねましても、久子さへ立派に敎育けて置けば家の名は何時でも立ちます」

「するとあなたは、家よりも人が大事だとお云ひなさるか」

「わたくしは爾う考ねます」

「これは驚いた、夫ぢや話が違ふ、町人百姓の家は何うか知らんが、少しでも御扶持を戴いて居る者は、人よりも家を大事に致す、家が潰れては、何んな立派な子孫があつても何の役に立たぬでないか」

「然し家があつて人があるのではございません、どれほど大身なお邸でも、人があつて

家が立つのではございませんか」

「ます〳〵驚く、あなた大層論客にお爲りぢやの」

「間違ひがございましたら、何うかお恕し下さいまし、玄深が息を引き取らうと致しますときにも、久子の事を賴む、と申しました久子を立派に育てませんでは、良人に對する道が立ちません、家名ばかりを全う致しましても、その柱、礎となる人間が良くございませんでは、何の役にも立たないでは無いかと思ひます」

「成るほど、一理ぢや、では強てお勸め申しますまい、すると、久子さんが御成人なすつてから、然るべきお婚さんをお迎ひなさらうと云ふのぢやね」

「はい、左様でございます」

「それで一時家名は斷絶しても、止むを得ぬ運命とお諦めなさるぢやね」

「その決心でございます」

「ぢや、致し方がない、千人が千人、百人が百人、家名の絶ゑるのを苦痛に致すのをあなたは家よりは久子さんが大事だと被仰る、人さへ立派に育てゝ置けば、家は何時でも立つと仰被る、さう根本が違つて居ては、何う

お勸めすることも爲きない、由てわたしは手を引きます、處で、後の相談ぢやが、お上から御沙汰の無い中に、此方からお屆けなすつては何うぢや、同じ事でも、其の方が手奇麗な」

「何うか宜しくお願ひ致します、お上表の事は不案内でございますゆゑ、萬事お任せ致して置きます、假へ家は潰れましても、玄深

の恥辱に爲りさへ致しませねば、夫が何より
でございます」
家よりは人が大切であるといふ、そこに絹
子の優れた心が現はれる、家の相續を首尾好
くすれば、家に付いた扶持が下る、扶持も知
行も、人に付くのではなく、家に付くのが德
川家の制度であるので、主は瘋癲白痴でも、
家さへ立つて居れば家内は平和な生活を續け

て行くことが能きる、その結果、何處の家中
でも、人よりは家を大切にする風儀に靡く、
假し不具者でも、假し狂人でも、相續の男兒
があると、立派に家名は立つて行く、現に死
んだ者を病氣と披露して異まぬ習慣の行はれ
るのもその爲めである、何處からでも好い、
二男三男を迎へて、相續の屆けをすると、そ
れで家督がすぐ定まる、家を大切にするは祖

先の祀を絶やすまいとする高尚な風儀に根ざして居るので、結構な良い掟ではあるが、それも形式にのみ流れると弊害が深くなる、絹子はそれに氣付いて居たから、斷然と家を捨てた、家を捨てるのは扶持を捨てるのである

さうして一平民となつて一心に愛子を守護した。

祖先崇拜の根本義は、心身ともに強健な良い子孫を作るにある、良い子孫さへ生きて行けば、祖先の祀は永久に續かれる、いかに先祖の廟塋を玉にし黄金にしても、それを祀る子孫が絶ゑ果てゝは何にもならない、絹子はそれも考へた、一人娘を立派に育てゝ、それの腹に擧れた小供が、有りだけの力を家の爲に注ぎ、またその小供の擧げた子孫が、身と心を健かにして、これも力一ぱい働くやうに

なつたら、假し一たんは家を潰しても、今日の地位に優つた地位を得、今日の家に幾十倍した宏大な家を作るであらう、その種はわしが蒔くのだ、子孫の運命はわしが作るのだと自覺して、當時にあつては珍らしく家を捨てゝも、人を取らうとの心を決めた。

彼女が家に付いた扶持に離れ、家に付いた役目を捨てゝ、一本立の身となつたは、その

年の夏であつた、彼女は身に付いた有らゆる物に離れても、只一人の久子さへ守つて居れば、それが第一の歡びであり、將た滿足であつた。

三

徳川十五代將軍慶喜が三百年來握つて居た政權を還し奉つて、明治維新となつたとき、

久子は漸と十歳であつた、扶持に離れてから足掛け六年、家に貯蓄といふも無く、奥醫師の身が財産のある筈はない、絹子は手一つで家を支ね、また手一つで久子を養育した、世は王政の昔に復つて、天地の再び開けたような慶びに遭つたとき、絹子に夙く起きて、久子と共に朝日を拜んだ。

「六年前、七年前、御扶持を失はないよう

にと云つて、お心付け下されたる心切なお方々も、皆なお扶持にお離れなされた、家をのみ大切に思召したお方々も、その家を守るには良い人を作らなければならない事がお分りになつたような、これからは禁廷様の御代となつた、わし達のような賤しい者が、禁廷様を拜むことは爲きぬゆへ、お日様を拜みませうお日様の御恩は、禁廷様の御恩も同じこと、

聞いて居ます」

久子も東の方角に向つて、小さい掌を合せた、絹子が王政維新に對する時の感想は只此の一事で盡きて居る、毎日の仕事にいそしむ前、まづ太陽を伏し拜む、赫炳たる太陽の御光、それが直ちに胸臆の底に徹して、知らずの間に光輝ある心を作る。

「光輝ある生涯」

この語が久子の全生涯を貫く、いかなる暗の底に落ちても、心には光輝を有つて居た、光輝は時に同情となりまた忍耐となり、外に柔く、内に剛い確乎な眞直な精神となる、久子の心を導いたものは、幼いとき知らず識らずの間に受けた太陽の感化である、あらず、太陽を拜する事を忘れなかつた絹子刀自の美しい感化である。

「さあ、お手習ひを爲さい」

絹子は賃仕事をしながら命じる、久子は手習ひが嫌ひであつた。

「わたくし、お手習ひは後にして、御本の方を前へ讀みます」

「また我儘をお云ひなさる、女に我まゝがあるのは、鏡に曇りの掛つたのと同じであります、曇りのかゝつた鏡は、鏡の用を致さな

い、我儘な女は女としての價がありません、人は自分の嫌と思ふことほど、努めて致すようにせねばなりません、嫌ひなことは必然下へ手に極つて居ます」

嫌ひな事ほど親んで克く努めるようにせよとの教訓は、子女に取つて此の上もない好い教訓である、久子は教を奉じて字を習つた、其頃の娘として相應な書物も讀んだ、裁縫、

行儀も皆な仕込まれた、然し何よりも深く且つ重く躾られたのは、女の守つて行く道であつた、昔風の日本婦人として些細の落度も無い家庭教育であつた。

「斯う御時勢が變つて參ると、人の心も變つて參る、殊に異國の人が入り込んで來てからは、何かについて異國の風俗や品物が、どし〳〵と入つて來るが、之れに心を移しては

爲りませんよ、二百年三百年和歌山の鎮として、立派に建つて居たお城さへも毀たれ、五万六万の御家中、何れも御知行にお離れなすつて、中には各地へお引き移りになつたお方もある、お前が生れなさつた頃は、御同席も恊はなかつた御家老樣も、御用人樣もわし達も平等で、さし對ひにお話しが爲きるようになつた、これも皆んな禁廷樣の御威光が分隔

なく及んだのでありますから、まことに結構なお芽出度い事、町人も百姓も、御家老様も御用人様も誰れ一人日本に生れない者はありませぬ、御先祖を洗つたら、原は親類や一門の集りに相違はないから、斯う爲り行くが當然ではござらうが、御時勢は變つても心が變つてはなりませんぞ、異國人が來ようと、舶來の品々が津々浦々へ蔓らうと、人情は何う

ならうと、お城やお屋敷が頽れようと、お日様は昔の通り微塵の相違も無く東の天へお昇りなさる、お伊勢様を大氏神に戴くものは、皆なお日様をお手本にせねばなりません、身体には舶來の物を着けても、心までが異國人の眞似をしては爲りません、異國にはお伊勢様がお在でにならぬ國は日本人の住む處でない、お伊勢様のお在でにお前方は

これから人間の務をせねばならぬ年ぢやに由つて、よく〳〵此の事を腹の底に彫んで置かぬと日本に生れて日本の有難さを知らぬようになります、今でさへ恁樣風でござるから、世の中が進むに連れて、異國の風俗が段々入る、その時、華美な品物に醉ふてはなりませんぞ、おのれは伊勢太神宮を氏神樣に持つた日本の女ぢやと思ふ心を少でも忘れては爲り

ません」

少時の休息時間も無く賃仕事をし、それから受ける些少の報酬で、一家の生計と、久子の敎育費とを支へて行く絹子は、一針の油斷も無く万事に氣を付けて、久子の敎誨を忘れなかつた、維新當時まで扶持を戴いて居たものは、それに對する公債証書を下付されたがその前に家名斷絶の宣告を受けた絹子は、爾

うした下され物に温まる慶びさへ受けなかつた、その爲め、一椀の飯、一杯の汁も、自分の手から稼ぎ出さねばならぬ破目に落ちて居た。

何れほどに稼いでも働いても、高が女の腕であるので、兎もすると不足が出る、不足を補ふに道のない貧世帶は、それだけつゝ貧へ沈んで行く、久子が立派に成人して行くのと

は反比例に家の内は痩せ細る。

絹子は原が農家の出である、けれど弱い時から紀藩の國老三浦長門守の奥に勤めて、直接に武士の道を攝取する便利を得た、絹子を知つた人達が「お絹さんは何樣御奉公を爲されたのぢや」と驚くほど奥方の氣に恪ふ、普通の者は、三年五年、長くも十年とは續かず暇を願ふ者の多い間に、絹子は二十年の長い

間一度の失策もなく忠義一圖に奉公した。

「置いてさへ戴けたら、わたしは一生御奉公を致します」といふ、その眞實が奥一ぱいに徹して段々信用が厚くなる、奥向一切の事は絹子の手に處分して、主人に安心をさせて來た、玄深と結婚したのも、長門守の聲掛りである。

「芽出度い〳〵、玄深は典醫の中でも學問に

秀で、居る、いつまでも睦じく暮らせ、荷物も轎子も邸から出して遣る」とまで云つてくれた、即ち、絹子は三浦家の表門から轎子を舁かせて、立花の家へ縁付いたのである、農家には生れたが、二十年の武家奉公に、此ほどの信用を得るまでの修養を積んだ。

故にその腸は鐵石である、その魂は武士で

もし絹子が普通の女子であつたら、女の痩腕に賃仕事して、苦しい貧世帶を張つて行くよりは、然るべき婿を迎へて吾身と久子とを任せたかも知れぬが、絹子は如何な艱難に沈んでも、女の操は傷けまい、良人が今果の際に、くれ〳〵も頼んで行かれた久子に二度の父は持たすまい、昔小野寺十内は、四十六人の義士と共に、故主の遺志を繼いで、仇吉良

上野介を討ち取るべく京都の家を出るとき、妻丹女に云ひ殘して「家に貯蓄のある間は、何うともして生きて居なさい、もし物が盡きて命が殘つたら、その後は沈ち着いて餓死をなさい」と云つた氣な、武士の貴むべきはその覺悟である、日本の婦人の踏むべきはその道である、力の續く限りは働きもし稼ぎもして、少しづゝの賃錢を得、それに不足を生じ

た時は、家の物を賣代し、それでも生計の立たぬときは、母子が抱き合つて餓ゑ死にするすれば其處に道が立つ。

絹子の決心はそこにある、貧乏は恥でない道に外れた行爲をするのが恥である。

斯う思つて艱苦を凌いだ。

されど二十年近い絹子の貧乏世帶、良人に別れた後の心配と苦勞、御典醫の一員として

匱しからず暮らしたときから、扶持に離れて見る影もない狀態に落ちた後の經驗で、人の情の厚い薄いも知れ、世の中の酸い甘い辛い味も嘗め盡す、此の間の苦勞艱難が、何れほど久子の爲めになつたかも知れない、譬へて云ふと、地から出たばかりの玉を、谷川の瀨へ投げ込んで、波と石とに洗ひ晒らしたようなものである、波に揉まれ洗はれて、眞の光

りが玉に見ゐ、貧苦のどん底に鍛はれて、人間の眞の光りが現はれる。

その時の悲みは骨も痩せるように思つたであらうが、それを堪ゐた強い意志が、やがて久子の堅い心となつて、終に山本家の基礎を築いた、女の力も斯うなると偉大なものである。

四

家名の斷絶よりも、久子の教育が大切である、と覺悟して、輕々しく立花家の相續者を決めなかつた絹子は、明治十年七月、久子を山本眞一郎へ緣付けた、貧のどん底に落ちた立花家へ養子するよりは、將來有爲の人を見立て、久子を嫁入りさせるが好からう、人

さへあれば家の名はいつでも立つ、との意志であつた、彼女の人物主義は終始を貫いた。

眞一郎は和歌山の人でその頃免許代言人をして居た、免許代言人は今の辯護士である。

山本眞一郎は法律家であつた、そして風雲の機會を待つ有爲の人物であつた、維新の際は征東總督宮に從つて、奥羽の戰場に加はつた經歷も有つて居る、陸奥宗光等と共に、藩

の先覺者三浦氏の塾に入つて、螢雪の苦を嘗めたこともある、それから明治三四年頃和歌山の健兒百五十餘人を伴れて、東京へ出た事もある、この上京が何の爲めに爲されたのか定かでない、されど夫等多數の健兒が、ある時「陸奥を遣つ付けろ」と云つて騷動した事がある、眞一郎を除く同行の全部が、結束して出ようとする時、旅館の下女から「旦那大

變でございますよ、早くお止めになりません
と、何樣事が起るか知れません」と密告せら
れ、驚く中にも覺悟を極めて、今にもどやど
や玄關へさし掛らうとする健兒の前に突立ち
「さあ、乃公も一所に伴れて行け、それが
爲きなかつたら、乃公の首級を取つてから行
け」と大喝して、さつと廣げた大手の下に、
百五十人の暴擧を喰ひ止めた事もある、陸奥

氏にどうした恨みがあつて、恐しい尖頭を向
けようとしたかは明瞭でないが、身を挺で、
白刃の前に突立ち、暴擧を未發に防いだ肚胸
と剛氣とに由つて、その人の半面を窺ひ知る
事が爲きる、殊に夫等不平の健兒を說き諭し
て、一人も殘らず警視廳の巡査を奉職させた
技倆に至つて、尋常一樣の人間でない事が想
像される。

さうして自分は工部省十四等出仕を拜命し然るべき地位に置かれたが、官員生活は詰らないと云つて辞職して、國へ歸るなり免許代言人に爲つた、久子と結婚したはその時代で家を小松原町に移した。

眞一郎が工部省を辞職したのを、陸奥が聞いて「お前何故辞職したのか」と問はれたとき「なに大した事はない、巡査に小便を引かけ

たのだ」と答へた、との逸話がある、これで官職に淡泊であつた性情を知ることが爲きるでないか。

眞一郎の親友としては、岡本柳之助があつた、紀州第一の人物と云はれた津田出の幕僚として名を知られた盧路嘉一郎があつた、眞一郎は大酒をする、花柳の巷へも出入する、何事も熟く知つて居ながら、家庭では無理を

云ふ、妻としての久子の頭上へ、徐々に暗い影がさした、絹子が此の人ならと見込んで合巹の盃をさせた眞一郎の胸に、幸福の神は宿つて居なかつた、取り分け久子が心配したは何事にもよく氣の轉る事であつた、これなら と思つて仕掛けた事も、少し面白くない事があると、忽ちに捨てゝ了ふ。

「これでは可けない、此のお心は何うにでもして矯め直さねばならない、もしわたしの力で矯め直すことが爲きなかつたら、わたしが確乎と腹を括つて、良人の缺點を補つて行かねばならない」

久子は緣付いて暫くすると斯う考へた、心の變るたびに基礎が動く、それでは家の發達する時があるまい「旦那樣はお酒が好きである、少くもお酒を喫つて在らつしやる間は、

家からも世間からもお心が離れて居る、少しの間でも心が離れては、その間づゝ家の活動が止まつて了ふ、さうした缺點を補ふのは妻たる者の務めであらう」續いては斯うも思ふ

眞一郎は外へ出て金を使ふ、その高が少くない、それを見ては「外のお入用が多いだけ家の入用を約めねばなるまい、外でも物入り内でもまた物入があつては、いつか究迫の時

が來る」と心付いて、爲きるだけの儉約をした、眞一郎は時々藝妓を大勢伴れて歸つて來ることがある。

「酒だ〳〵、酒を持つて來い、此奴等に御馳走をして呉れ、もつと〳〵美味い物を持つて來て呉れ」

座敷では酒宴が始まる、藝妓どもが入り亂れて歌ひ噪ぐ。

されど久子は一度も恨み腹立ち悲んだ事がなかつた、下女端女と一所になつて、酒下物を調理する、時には仲居同様に立ち働く。

「奥さま、あなた何故もう少し嚊しく被仰らないのでございます、あなたが温和しくして在らつしやるから、旦那様可い氣になつて好きな眞似を遊ばすのでございますわ」

召使はくい〳〵思つて忠告するが、久子は

いつも平生の態度を持ち續けた。

「旦那様の仰せ付けを背くことは爲きません、旦那様がお歡びになれば、わたくしも、お前方も、家の者は皆な歡ぶが當然ぢやないか、それにお遊びのお邪魔をして、何うなるものですか、わたしが御酒のお世話をする位ゐは何んでもありません、旦那様の御機嫌さへ宜ければ、それに越した歡びはありません

よ」

斯う云つて、他意なく待遇しては居るが、夫でも何かに脅かされるような不安を感ずることが屢々あつた。

それは嫉妬の爲めでも無く、また賤しい女に家庭を穢される腹立でもなかつた、時には酒宴の曉に達する事もあつて、第一には召使が迷惑する、第二には不時の物入がある、一

度二度では無く、三度五度では無く、時々斯うした騒ぎをするのに、その度々酒肴を調理して、女どもを饗應しては年分の失費が何れほどかも知れない、さりとて旦那の爲さる事を差し止める理には行くまい、お金を掛けず旦那樣も御滿足、そして女共も歡ぶ好い工夫がありさうなものだ、と考へた、その結果、

「さうだ、お酒の代りに搔餅を燒いて遣ら

う、世界は異つても、女の好きな物は大体極つて居る、殊に彼等は毎日酒や肴に飽いて居るから、偶には爾うした異つたものを欲しく思ふ心もあらう、兎も角一度遣つて見やう」と思ひ付いた。

する中に、眞一郎はまた多勢の藝妓を伴れて來た。

「酒だ〳〵、女どもに美味い物を食はせて遣

れ」

眞一郎は例のように云ふ、久子は平生より

も機嫌の好い面をして、

「今日は皆さんにお搔餅を燒いて上げませう、どんなに美味いか、一度食べて御覽なさい」

云ふ中に用意して置いた鐵網と搔餅とを取り出して、火鉢の上で燒きかける。

「どうもお珍らしい、お酒よりはその方が御馳走でございます」

久子の計畫は當つて、女は火鉢をぐるりと取り卷く、女が笑顔で居さへすれば、眞一郎も機嫌である。

「奥さん、わたしにも焼かせて頂戴」

終には自身に焼くのを樂むものさへ生きた搔餅の馳走は臺所に手數がない、費用が百分

一以下であがる、それで女も滿足し、眞一郎も機嫌が可い。

斯うした經驗を積むごとに、一家は家内の心掛け一つて、何のようにでも遣つて行かれるものである、との確信が付く、殊に眞一郎の如く豪放で、大酒家で、胸底の一部に絶ねず何等かを持つて居る不平家を良人に戴く者は、一入深く家内の心掛が必要である、良人

は家への心柱である、良人は家の太陽である、御先祖の再來である、家族家眷は眞心を籠めて大切に仕へなければならぬのは當然である が、その方法はいくらもある、良人の仰を唯々として奉ずるはかりが能ではなく、良人の心に從ふばかりが道ではない、柱には兎もすると蟲が入り、太陽には兎もすると雲が掛る その蟲を除き、その雲を攘つて、良人を守る

のが第一の務である、さりとて逆つてはならぬ、趣味や嗜好に點を打つてもならぬ、良人の心は良人の心として尊重し、良人の趣味嗜好は家の風儀として敬ひ、その間に立つて、缺點を補つて行くのが、生涯の仕事である、此の仕事を完全に終つて、初めて妻の務めが成し遂げられる。

良人の歩調が稍ともすると、他道へ入つて

行かうとするのを見るたび、久子はそれについて考へる、正しい心の底から出る考慮ほど人に反省を與へるものはない、妄念を去り、我執を去り、私の欲を去り、邪氣を去つて、一圖に家を思ひ、良人を思ひ、飜つて已の弱點を思ふとき、過去の經過を土臺にして、將來の道程に一條の光明を認めないことは無いしつかりと掴んだ綱が次第々々に太くなつて

一生をそれに縋つても危氣の無い強みが得られる、その強みが頭腦と腹とに坐つた時、妻としての覺悟が定まる。

久子は次第にその覺悟へ向つて進んだ。

五

陸奥宗光と眞一郎との間に、何樣關係があつたか夫は分明でない、然し、眞一郎が工部

省を罷めて和歌山へ歸つた後も、屢次上京した事は久子も薄々聞いて居る、上京するとまづ陸奥を尋ねて、何事かの相談に時刻を費やすさうなとの噂も耳にして居る、然しそれは重に久子が嫁入をしない前の事で、結婚後はあまり上京しない、奥陸との間には時々郵書の往來がある、久子は普通の交際關係であらうとのみ思つて居た。

結婚した翌年、眞一郎は代言上の用を帶んで上京した、恰ど六月中旬で蒸々暑い、久子は懷妊五月で、帶を締めた處であつた、一人淋しく家を守つて居ると、ある日の朝眞一郎から電報が來た、電報と云つても、和歌山まで來るのでは無い、大阪まで電線で來て、大阪から和歌山まで郵便で扱はれるのである、何事かと思つて見ると「京都まで出て來い、

少し話がある」と記して、京都の宿所が書いてあつた。

久子は何様用であるかと思つてすぐ出發した、今とは異て、大阪までの道中が容易でない、大阪から京都までは滊車に乘て、指定された旅宿へ着て見ると、眞一郎は機嫌の好い面で莞爾と酒を飲んで居る、電報で呼ひ寄た程の用向は、何であるかと思ひ煩つたが、用

事らしい話は一もなかつた。

「今度は京都の名所古跡を見せて遣るよ、恁樣事は滅多にないから」と云つた。

二三日は見物に日を暮らした、夫から大阪へ來て、大川町に宿を取つた。

「大阪にはこれといふ名所もないが、それでも一兩日は遊べるだらう」

眞一郎は始終上機嫌で、ゆつくりとした氣

分で居た、久子もそれに伴れて、結婚後遂に覺ゐぬ爽かな活々とした心になつた。

すると或る朝、宿屋の二階座敷に横はつて新聞を讀んで居た眞一郎が、何に驚いたのか急に眞蒼な面をして、暫く考ゐに落ちて居た久子は何事が起つたのかと思つて居ると、

「あゝ陸奥が遣られた」と一言云つて、むく〳〵と起き直つた、その時はもう平生の面

に復つて居たが、それでも眉の間に黑い雲が掛つて居た。

久子は後でその新聞を繙いて、陸奥宗光が西南戰爭の事に關係して本官（その時は元老院幹事）を免ぜられ、位記返上を仰せ付けられ、宮城の監獄へ護送せられた等の記事が出て居るのを見て、深く心に思ひ當つた。

眞一郎はその日行李を收めて、急に和歌山

の家へ歸つた、それまでゆつたりとした態度で、莞爾笑つて居た上機嫌はもう出なかつた

眞一郎に不平の氣が現はれたのはその時からであつた、從來も大酒したが、更に甚しく大酒するようになつたは、此の時からであつた、久子は「陸奥さんの失脚が良人の根底を動搖させたのであらう、お酒でも喫らずは堪られぬほど落望なすつたのであらう、斯う

した時、少しでもお心を慰めるようにするは妻の大切な使命である」と思つて、懷姙の身に爲きるだけの事をした。

六

眞一郎は物に飽く氣質がある、そこへ爾うした失望を感じたので、いら〳〵と功を急ぐ風も出た、それまで住んで居た世界が動きか

けたので、更に他の世界を見付けねばならぬような心を感じたらしく見えた、その結果、免許代言人をして居るのが厭になつた「こんな事をして居ては、前途がない、乃公は新らしい事業をして見る」と云つて、本町へ轉宅すると、そこで時計製造業を初めた、工部省時代に得た智識が爾うした事業を思ひ立たせる動機を作つた。

「外國の機械ばかりを買つて居ちや可けない、日本で使用する物は、成るべく日本で製作して、しまひには、彼方へ輸出するようにしないと、日本の富が段々西洋人の手に移つて行く、今はそんなでもないが、もう五年か六年したら、何處の家にもきつと時計を持つようになる、日本の戸數を三千万と假りに見積り、時計一個を平均金三圓とした處が、九

千萬圓の金は外國へ流れてしまふ、それを日本で作つて、どし〳〵賣り出すことにしたなら、九千萬圓の金が日本に留まる理だ、商賣をするにも、學問をするにも、國家の利益を土臺にしないと、此れから前の進運が得られない」

眞一郎の主意は此であつた、不完全な機械經驗のない職人、それ等を家へ寄せ集めて、

眞一郎自身も工場の人となつた、同じ本町二丁目に時計を商つて居た小笠原といふ人がそれを見て、

「山本さん、お止めなさい、とても成きる物ぢやありません、あなた見す〳〵御損を爲さる」と注告したが、負け嫌ひの眞一郎は熱心を表に見せて。

「いや遣つて見る、西洋で調きる物が日本

で調きぬ筈はない」

「それぢや斯うしませう、あなたのお手で一つでも時計が成きたら、わたしの店にある品物を全部進上致しませう」

「諾し、貰つて見せる」

されど熱心のみで意志を貫くことは爲きない、眞一郎の理想と「斯うした新らしい事業を目論んだ先覺者がこゝにあつた」といふ事

とを殘して、遂に不成功に終るの止むを得ざるに至つた、お蔭で小笠原の店の時計は一顆も眞一郎へ進上されず、山本家の工場には、山と積まれた鐵屑と、さまゝな器具機械とが、主人の無謀を嘲けるように殘つた。

久子は前年十二月産の紐を解いて男兒を分娩したが、生後七日目に死亡した、時計製造を始めたのは、それから二年を經た十三年四

月であつたが、此の時久子は懐に可愛らしい男兒を抱いて居た、博一の生れたのは、その年の二月であつた。

七

時計製造に、多くの勞力と多くの資金とを徒にした眞一郎は「とても可けない」と見込みを付けて、同じ年十一月頃中止すると、再

び法律を研究する心になつて、

「これまでは學問が足りなかつた、乃公はもう一度書生になる」と、云つて、十四年の春、明治法律學校へ入學すべく東京へ上つた久子は良人に代つて一家を處理し行くべき機會に遭つた、片手に幼兒を抱いて、片手に家庭の全部を支配した、この時彼女の相談相手になつたのは、云ふまでも無く母の絹子であ

つた。

眞一郎の東京修業は、僅一年に過ぎなかつた、翌十五年二月歸ると暫く何事かを考へて居るようであつたが、七月頃から、

「田舍に薫ぶつて居ては詰まらん、大阪へ出掛けよう、法律よりは商賣だ、此からは實業方面に活躍しないと、遂に人の後へ落ちて了ふ」と云ひ出し、同じ九月家を提げて大阪

へ移住した、最初に借りたのは江戸堀の中央で、隨分大きな家であつた。

「何でも好い、うんと金を作つて國家の爲めになる事がしたい」

斯う云ふのが眞一郎の望みであつた、或る事に失望した後の心は、一圖に爾うした方面へのみ進んだ、然し商賣には無論馴れない、家を借りると共に、番頭手代を五六人も雇ひ

入れて、手廣く取引きを始めようとした、それを見た懇意な人は、「そんな無謀なことをして何うなさる、此れだけの店へ品物を積むだけでも容易でない、大きな店で小さい商賣をするよりは、小さい店で大きな商賣をする事を考へねばなりません、これが秘訣です」と忠告した、由て天滿瀧川町へ轉じ、更に北新地一丁目へ移つて、こゝに舶來小間物商を始め

めた、これが明治十六年一月、久子二十六歳の時であつた。

店は可なり大きかつた、品物も必要な物は皆な取揃へてあつた、馴れぬ商賣をするのであるから、十分の利を見る事は爲きないが、久子は此で何うか斯うか遣つて行けるのだらうと嬉しく思つた、根抜ぎにされた植木が彼方此方へ持ち歩かれて、漸くこゝへ栽ゑ付け

られた心安さを感じないでは居られなかつた

「此で生活の基礎を立てねばならぬ、何うか繁昌致しますよう」と心に祈つた。

眞一郎は例の小節に關はらぬ氣質で、店があらうが無からうが、そんな事には頓着無く酒を飲む、明治十一年陸奥氏失脚の新聞を讀んだ時受けた心の瘡痍は何時まで經つても癒いさうに見えなかつた、酒の爲めに荒んだ考

えが、段々癖みを持つようになつた、天地の大をも呑み盡す程の氣象であつた人が、兎もすると疳癪を起す程になつた、久子に對する待遇が荒々しくなくて來た、何か氣に違ふことがあると、手を擧げて打擲する事さへあつた。

久子は時に悲みもした、然し「悲んで居る時ではない、良人の心を横道へ傾くのは、わ

しの仕方が悪いからである、良人の心は、此の人の爲めにならと一圖に信じて居た人が入牢なされた失望と、世の中が思ふようにならぬ憤怒とから、酒の力を借りて鬱をお忘れなさる、その酒の毒が斯くした御氣質を作るのである、良人の心では店の物を商つて一錢二錢の利を收めるを好まれまい、それはわたしが引き受ける、晩酌のお下物も能きるだけお

口に適ふ物を自ら調理してさし上げる、博一の養育は母の務めであるから云ふまでも無く引き受ける、家事一切は全部を自分が脊負ふ氣になつて、爲きるだけ良人の心を安め慰め胸の底にお受けなされた深いお瘡痍を治すようにせねばならぬ、悲んで居るときでない、確乎せねばならぬ、確乎と家を守らねばならぬ」と思ひ返して、まだ三十にも爲らぬ身を

粉に粹いた、その精勵に由るだけでも、久子の店は繁昌しなければならなかつた、少しづゝでも家の基礎が固まつて行かなければならなかつた。

然も事實は反對で、何うかすると基礎が動く、店の品も多少は捌るが、それから出る利益よりは、月々の雜用が餘計に入つた。

客が多いからである、店に老舗がつくと共

に「山本眞一郎が小間物店を出したさうだ、様子を見に行つて遣らう」と云つて遊びに來る連中が多くなる、中には眞一郎と同じ不平同じ失望を抱いて居る者もある、和歌山や東京で莫逆の交りをした人もある、さうした人の來訪を受けるたび、奥の座敷で酒が始まる久子は店と臺所とへ出つ入りつして、商ひもする、下物も作る、その間に博一の世話もす

る、殆んと三面六臂の活動をして居たが、小間物店から出る位の利益は、一二夕の酒宴の雑用に盡きる。

收支の償はぬはその爲めである。

眞一郎の友人は多くあつたが、最も親しく刎頸の交はりがあつて、毎日のように出入りしたのは、和歌山藩の俊傑として知られ、桂太郎と同時に陸軍大尉となり、西南の役には

少佐に進み、第四旅團別働隊の參謀として宇土に上陸し、中佐山川浩と力を協せて、熊本城の重圍を衝き、始めて籠城軍と連絡し、人吉の追擊戰には山地將軍に代つて一隊を指揮し、さしもの薩軍を擊破つた事から、一時にその名を知られたが、十一年竹橋暴動事件のあつた時その首謀者と目さゝれて、終身官に就くことを禁ぜられた岡本柳之助、續いては

やはり和歌山藩の英才として、津田出の懐刀と云はれ「和歌山に此の人あり」と知られた塩路嘉一郎、普眼寺鐵吉などであつた、逢ふと必ず酒が始まり、醉ふと必ず不平談が起る何れも風雲の志を持つて居ながら、時に合はぬので、鬱勃の氣を酒で消して居る人達の集ひであるから、談話は激越の調を帶ぶ、殊に岡本柳之助の朝鮮經營談などが始まると、一

座は物凄いほど殺氣を帶ぶ、不平の氣が盃の間に流れる、慷慨淋漓たる間に三舛や五舛の酒はすぐ無くなる。

その酒の代は、いつも久子の懐から出されねばならなかつた、奥の座敷で、今にも黒雲が巻き起るかと思ふほど激越な談話が交へられて居る時、臺所では久子が酒下物の工面に惱まされて居た。

彼女はその年六月男子を分娩した、三人目の産である、されど不幸にして四月ほどすると死亡した、出産から引き續く葬式にまた少からぬ費用が入つた。

その中でも、眞一郎は酒から離れた事がなかつた、來客も絶ねずあつた。

八

店の物は賣れても賣れなくても、久子の懷に金はあつても無くても、其樣事には頓着無く眞一郎は日を送る。

「あなた、お小使がございません、それに店の品も仕入れねばならぬようになつて居ります」

久子から斯うした相談を持ち掛けても「お前が好いようにして置け」と云ふばかりであ

る、好いようになる中は可いが、好いようにならぬ時が往々ある、爾うしたときは天滿の茶六へ相談に行く。

茶六は天滿市場に知られた問屋で、今宮六兵衛の名は長者番付の中位をしめ、「茶六の硯箱中を開けると五六百兩」と唄にさへ謠はれた富限者である、その内儀のお里は眞一郎の從妹に當る關係から、見ず知らぬ土地で一人

の相談相手を持たぬ久子は、何かと云ふとお里の許へ心配を持つて行く、お里は同情の深い心切な性質であるので、爲きるだけの事はしてくれる。

けれど外面から見ぬは人の内部で、さしもの富家も、その頃は左衽に爲つて居た、久子が苦しい事情を語ると、

「あんたも苦勞しやはりますなあ、わたし

も同しですせへ」と涙を流した、さうして質屋の通帳を貸して呉れたとき、久子は此ほどの家に、何うして恁様物があるであらうか、と驚いた。

貧しい中には成長したが、久子は生れて以來質屋の敷居を跨いだ事など無かつた、懐妊な身体を袖に包んで、鐵屋(質店の家號)の暖簾を潜つたとき、生きながら地獄へ落ちたのか

と思ふほど硬くなつた、然し、この暖簾を潜りさへすると目下の危急が救はれるのだと氣付くと、活きた血が動き始めて、押されるように内へ入る、さうして博多の帶、一樂織の羽織、そんな物を燈火のさゝぬ暗い處から出して、幾許かの紙幣を受けて出るまでは、眞に呼吸も止まるほどの辛さ耻かしさであつたが、長者番付に名の出て居る茶六のお家さん

さへ、斯うした境界を經て居なさるのだと思ふと家の爲めには此の上の苦勞をする位何でもないと思ひ返す。

岡本柳之助はその頃大阪に妾を置いて居た十一年終身官途に就くことを禁ぜられてから些の收入も無く遊んで居るので、時には小使にもさし問ゐる、妾の手當にも事を缺く、爾うしたときは眞一郎の許へ來て。

「少し貸せ」と無心を云ふ、眞一郎は例の無頓着な氣質から、

「岡本に金を出して遣れ」と久子に云ふ、久子も無い時が屢次ある、理を云つて斷つても「そこを何とか都合して遣るのさ」と云はれると、二度繰り返して斷はることもならずまた鐵屋の軒を潜る。

斯うした期間が一年あまり續くと「此處で

何うなりともして」と勵み思つた久子の希望が再び根本から覆へされた、頭髪の物、身の飾、帶、衣服が一個減り二個減りして、終には簞笥の底が空になる、されど久子は一たん遣りかけた事であるから、何うかして仕遂げたいと思ふ下から、眞一郎の心はまた變つて伊豫の安質謨尼の出る鑛山を經營する事にした。

「今度こそは物にして見る、乃公に小さい商ひは爲きぬが、大きな事ならきつと遣り遂げる」

眞一郎は斯う云つて北新地の店を終んで、京町堀三丁目へ引き越すと、おのれは伊豫へ出張した。

されど此の經營もまた失敗に終つて、遂に獨乙商人の手へ讓り渡す事となつた、久子は

大阪の家を護りながら、「良人の事業の成功致しますように」と祈つたが、その効は少しも無かつた、この期間が十七年から十八年に續く、四人目の男子顧彌太を擧んだは、十九年の一月であつた。

鑛山を賣つた金があり、和歌山に預けて置いた少しばかりの財産を金にしたので、その時は多少の餘裕があつたから眞一郎は天神橋

南詰を西へ入る處へ轉宅して、比較的規模の大きい西洋洗濯屋を始めた、此の時も今度こそはと思ふ奮發心が火と燃えた。

當時久子の相談相手であつた茶六の家は、段々に逼塞して、遂に天滿の家を支へることさへ爲きなくなつた、久子は以前の恩誼に報ふのは今であると覺悟して、自分の力で爲きるだけの事をした。

「人に恩を忘れるほどの恥はありません、畜生でも恩を報ゆる、それが人間の皮を被つて、恩を忘れるようであつたら、その人は、生きながら、畜生道へ落ちて居るのだ」と母が平生に云ひ聞けた、その詞を骨に刻んで居る、久子の報恩觀念は、和歌山の甚五兵衛町に詫住居をして居た頃、培はれたのが、機に觸れて芽を出すのであつた、小供の時に受け

た感化は、胸の何れかに彫まれて、生涯の運命を支配する根本になるものである。

されど此の洗濯業も思はしい成績を擧げる事が爲きなくて、一年の後廢業の止むを得ざるに至つた、次に思ひ立つたのが製革業である。

「今度こそは成功して見る、なに成きぬといふ筈はない、此からは下駄や木履の需用が

去つて、必と靴の時代が來る、それで製造所を木津に置いて、販賣部を松屋町に設ける、店は小賣も卸もする」

眞一郎の最初の意氣はいつも此である、現在の事から次の事業へ移らうとする時は、も う現在に飽いた時である「今度こそは」と思ひ立つて、新らしい事業に手を着けるときは成功ばかりを夢みて失敗が桁へ入れてない、

新らしく思ひ立つた事業の底から、黄金の水でも流れ出るように思ふ、殊に酒の爲め荒んだ心に、忍耐の氣が消磨して行く、今一息努力したら、成功することがあるかも知れぬと他からは見ゐる事でも、豫定の成績が擧らぬと、すぐそれに慊氣がさす、不成功は最初から桁の中へ入れてないから、忽ち破靴の如く捨てゝ了ふ、その時はもう次の事業を考ゐて

居る。

何れほどの英雄でも、酒と戰つて敗北しない者は無い、身体を敗られるか、精神を敗られるか、早く降參するか、遲く破滅するかの相違だけで、いつか慘な敗れを取る、酒は人の目にも見ねず、自分にも心付かぬ間に、一面では内臓を冒し、一面では精神を破壞して行くので、その害毒を深く受けた者は、何時

ともなく精神が空虛になつて了ふ、心さへ充實して居れば、失敗を盛り返す力は出る、大楠公が笠置山の行宮へ伺候したとき「いかにしたら天下創草の大業を全うすることが爲きるであらうか、勝つことを一時に決して太平を四海に致すべきか」との御下問を受け「力をもつて戰つては、天下の大軍を集めても、伊豆相模の兵を鏖殺にする事は爲きないかも

は跡方も無く四散になり果てたが、大楠公一人幸ひに生きて居た爲めに、一年餘の後には千早の城の出現となり、太塔宮の活動となり主上の還幸となつて、建武中興の御大業を成就し參らせた、假へそれは一時の成功で、程も無く、再び天下の大亂とはなつたけれど、大楠公の充實した精神は、幾十度の戰場に馳駈して後れを取らない、幾多の艱難に遭遇し

て志を挫かれない、同僚が好い地位を占めて大功あるおのれが低い地位に置かれても不平の色は塵も出さない、內面の充實した者は、さうした區々たる小事の爲めに、魂を動かす塲合がないのである、されば大楠公は死んでも死なない、斃れても斃れない、あらず、身体は空しい骸になつても、魂は今も生きて居る、今後何千年何万年の後になつても、日本

は跡方も無く四散になり果てたが、大楠公一人幸ひに生きて居た爲めに、一年餘の後には千早の城の出現となり、太塔宮の活動となり主上の還幸となつて、建武中興の御大業を成就し參らせた、假へそれは一時の成功で、程も無く、再び天下の大亂とはなつたけれど、大楠公の充實した精神は、幾十度の戰場に馳駈して後れを取らない、幾多の艱難に遭遇し

て志を挫かれない、同僚が好い地位を占めて大功あるおのれが低い地位に置かれても不平の色は塵も出さない、内面の充實した者は、さうした區々たる小事の爲めに、魂を動かす塲合がないのである、されば大楠公は死んでも死なない、斃れても斃れない、あらず、身体は空しい骸になつても、魂は今も生きて居る、今後何千年何万年の後になつても、日本

國のある限り、大楠公の魂は活きて居る、充實力の偉大であり高遠である事は此れで推量られる。

それと反對に、內面の空虛になつた者は、妄信があつて確信がない、一たんの失敗に遭ふと、もう全局を悲觀する、心が現在從事して居る業務から離ると、すぐ他の新らしい事に移つて居る、忍耐のない處に成功の伴ふ筈

は無い、眞一郎も百五十人の健兒を率ゐて東京へ出たときは、まだ酒の爲めに內面を蝕はれて居なかつた、健兒が殺氣を帶んで、陸奥邸へ押し出さうと云ふ時「行くなら乃公を殺して行け」と怒號して、美事に彼等を食ひ止めたは、正しく充實の力である、一人の充實力で百五十人の健兒を壓服したのである、それほどの威力が酒の爲めに毒せられて、何樣

事業を思ひ立つても、一年か半年で皆な捨て去る、さうして心は有利な事業を求める爲めに隙間も無く働く。

その頃岡本柳之助は朝鮮經營の大志を抱いて彼方へ行つて居た、普賢寺鐵吉も他所へ移つて、大阪には居ないので、眞一郎と意氣の合つた酒友は盧路嘉一郎だけであつたが、それでも酒は依然として多量を要する、一挺の

孤卷が半月で空しくなるのが普通であつた。

九

眞一郎が事業を轉ずるたび、久子は新らしい危險の迫るのを感ぜずに居られなかつた、妻は良人に從ふのが日本婦人の道であると信じながら、見す〳〵失敗の影のさして居る事業に手を付けさせることの危さを感じ、且

はその失敗の繰返されるたび一家の生活を脅かされる事の深いのを考へ、更に段々生長して行く二人の小供の前途を思ひなどすると、堪へ忍ぶことが爲きなくて、一言二言意見することが往々ある、殊に眞一郎の失敗が度を重ねて行くほど、意見の數も加はつて行く。

元來久子と眞一郎とは、根本の氣質に於て調和せぬ處がある、久子は綿密で何事にも注

意深く用心するが、眞一郎は疎放で事ごとに用意を缺く、眞一郎は走るが久子は徐行する眞一郎は輕く自分を信じるが、久子は重く世の中の總を見る、眞一郎は氣が轉るが、久子はいつも同じである、その結果がついに衝突の種子となる、然も、それを巧に調和して行くのは久子の正しく愼み深い愛の力であつた眞一郎も已に缺點のある事は知つて居る、

それを補ふには、事業の成功を見ねばならない、爾して「どうだ、乃公の技倆を見たか」と自慢がしたい、その爲め「今度は〳〵」と新らしい方面へ手を付けて見る、それが失敗に失敗を重ねる原になるのだとは考へ及ばないで、斯うしたら望みが遂げられるか、斯うしたら一家の基礎が定まるか、とのみあせるその裏面には「此れまで久子にも苦勞を掛

けて居る、切て一年でも半年でも、安樂な生活がさせたい、博一にも顧彌太にも相當の教育をさせなければならない、それにしても金が要る、うか〳〵して居ては遂に先祖を辱める時が來るだらう」と考へて、自分には一生懸命で盡して居るが、そこに酒の氣の伴はぬことが無いので、他から見ると歩調が亂れて居る「今度も失敗に終つたら、一家が困難す

るばかりで無く、旦那の面目も立たぬ理である」と久子は思つて注意する。

それが眞一郎には強く當る、半分は酒が手傳つて、最愛の妻の心切をも受け付けない、後では有理と氣付くことでも、そこでは赫と腹を立てゝ、何の辨へもなく打擲を加へる、罵詈をする、甚しい時は鐵瓶の蓋を投げたりする。

然し、久子は爾うした叱責を受けるのを悲まないで、只管良人の事業の不成功に終るのを悲む。

「今度こそは」と思つて創めた製革事業もやつぱり思はしくなかつたので、半年程で廢めたが、松屋町の店は辛うじて維持して、靴その他の小賣を行つて居た、一家の生活はそこから上る小さな利益で立てゝ行く、眞一郎

はやつと自覺が付いたらしく、それを最後に新らしい事業へ手を付けようとしなかつた、それは明治二十一年で、博一が九歳になつた時であつた。

「乃公はとう〳〵失敗した、もう事業に手を出す餘力もないから、お前が乃公に代つてしつかり遣つて呉れるんだ」

酒の氣の無い時は、博一を膝の下へ呼んで

斯う命じる、中村敬宇翁の西國立志編が好きで、何處へ行くにも側を離したことがない、殊に第四編の序を愛讀して居たので、いつも其處を出して讀ませる、まだ小學校へ通學し掛けたばかりの小童に、

「さア讀め、こゝを讀め」と口づから敎へる、その序は漢文で隨分長い。

眞正學士、不耻爲賤業、耻之者非眞正學士

眞正文人不嫌俗務、嫌之者非眞正文人、（中署）今之讀書者、或耻以賤業治正、又不屑爲俗務、及不得已而賣履販繒、或折腰五斗則一切束書不觀曰我無暇矣、嗚呼人病無志耳、果有志矣、不病乎無暇也（下署）

博一は父に從いて難しい漢文を讀み且つ暗記しなければならなかつた。

「眞正の學士は賤業を爲すを耻ぢずとある

諺に云ふ坊主の坊主臭いは眞の坊主にあらずといふと同じぢや、眞に學問の志ある者は、いくら賤しい業務についても、それを耻とは思はない、業務は賤しくても、氣位を高く持てば、俯しても仰いでも天地に耻ぢん、いかに業務が高尚でも、その心が下劣であつては人中に面が出せない、家は靴の小賣をして居る、商賣としては賤しいが、乃公は根性まで

小賣商人に爲つてやせん、お前方も克くそこを考へて、將來發達の基礎を作らなければならないぞ、發達の基礎は學問から得る、學問が腹にないと心術が下になる、富と學問とを同じ程に持つてないと、眞個の人間とは云はれない、學問ばかりあつても金が無くては當世の上流者とは云へず、金ばかりあつても學問が無くては圓滿な人物と云はれない、富を

運用するに學問を基礎とするに於て、初めて立派な格式が作られる、それだから、一たび五斗米に腰を折つた者や、商賣を始めた者は一切書を束ねて觀ない者を後の段で戒めてある、學問の志さへあれば、暇の無い理はない朝一時早く起きても、夫だけの餘裕が生き、夜一時遲く寢ても、夫だけの時間は得られる由て暇の無いのは病まぬが志の無いのを病む

志の無い者は寢る暇があつても本を讀まぬ、戯談口を叩く暇があつても勉强せぬ、敬宇先生はそれを呵つてお在でなさる、これは學問の志ばかりで無く、商業でも、工業でも、志を立てる上に異りは無い、つまり時間を徒にしないで、世に立つ基礎を造るのが肝心ぢやだから見なさい、此の編の冒頭には、福運ハ勤勉ノ人ニ隨フ、幷ビニ英才ノ說と云ふ一節

が立てゝある、今讀むから聞きなさい」

眞一郎は眞面目に、且つ力强い聲で重要な點を讀み上げる。

「福運は盲人の如くにして人を辨せずと云つて此を咎むるものあれど、決して然らず、福運は實に眼目を具へたり、抑も世人の生涯を觀るときは、福運は必ず勤勉なる人の側に傍ふこと恰も順風穩波の航海に巧みなる者に

隨ふが如し、人の學問を爲すにたとひ高上なる學科と雖も、凡庸の才質を以て心を用ひ功を積み久しきに耐ゆれば必ず成就の地位に至るべし、たとひ卓越の才ある人と雖も、心を用ゐず、功を積まず、久しきに耐へざれば一事をも成就する事能はず、故に卓越の才は學問の爲めに必要にはあらざる事なり、絶大の豪傑と稱せらるゝものと雖も、大業は卓越の

才性ある人に非ず、たゞ資質平等なる人の久しきに耐へて、大業を成就せるものなり、或人曰く、英才と云て別に一種の才あるに非ず常人の憤發切至せるものを英才と云ふなり、或る有名の學者の説には英才と云へる者は他なし、勉强の力の別名なりと曰へり、戒福士他の説に、英才は心火の光を發する力なりと云へり、蒲豐は、英才は即ち忍耐なりと云へ

り――これぢや分つたか、福運には目がある
だから不勉強の人の側へは來ない、お父さん
や盧路さんの如に、酒ばかり飲んで居る者の
側へはちつとも寄り付かないで、勉強する人
の側ばかりへ行く、何れ程の凡人でも、用心
をして功を積む中には、いつか高尚の學問が
成し遂げられる、何んぼ才智に秀れて居ても
用心に缺けるときは、いつか凡人に爲つて了

ふ、それだから英才など、云ふ者は、性來い
てある者ぢやない、凡人が憤發切至した者を
云ふのぢやとも、勤勉の力の別名であるとも
心の火が燃ゑ發る力であるとも、忍耐が即ち
英才であるとも、さまゝな說があると云は
れてある、これも大楠公の話ぢやが、楠公が
十五六歲の時に、家來二三人を伴れて、奈良
へ見物に行かれた事がある、すると東福寺の

大釣鐘の下に、五六人も人が集つて、此の釣鐘を動かすには、何人力を要するであらうと評議して居た、するとその中の一人が、三十人力はきつと要るといふ、他の者も、それは無論要る、三十人力以下で、恁樣大釣鐘を動かす事がならうかと噂して居ると、默つて他の者の話を聞いて居た男が、いや、わしは一人で動かして見る、その代り晩方まで待たつ

しやい、皆の衆が晩方まで待つて下されたら美事に動かしてお目に掛けます、と云つた、他の者が信用しないで、阿呆らしい、そんな事が爲きるものか、能きたら何んでも進せるおゝ必と吳れるか、と詐ひながら立ち去つた大楠公はそれを聞かれて、深く不思議に思はれた、この大釣鐘を動かすのに三十人以上の力を要するといふのは間違ひのない事である

成るほど三十人力が要るであらう、それをさのみ大力でも無さゝうな男が、一人の力で動かして見るといふた、戯れに云ふのではない眞實それと思ひ込んだ事があるらしく思はれる、すると一人の力で此の釣鐘を動かす法があるに違ひない、全体何うして遣るのであらうと、流石に大楠公だけ、そこで沈と考へられたが、やがて思ひ付いて、供の家來に、此

の鐘を押して見よ、と云はれた、家來は畏つて押して見たが動きさうな筈はない、大楠公はそれを御覽になつて、もつと押せ、もつと押せ、とお云ひなさる、家來は力の限り押す一人の力で動かすには、晩方まで掛るといふた詞を覺へて居るので、何時までも押させてござる、家來は何んぼ押しても動く樣がないのに落膽して、若旦那樣これは到底動きませ

んと云ふのを、いや、もう少し押せ、と云はれた、そこでまた力を出して押して居ると、終に龍頭がゆら〳〵と動きかけた、大楠公はそれを見て、いかさま三十人力よりは忍耐の力が強い、家を守るも、城を守るも、この骨法を離れてはならぬ、と深く御發明なされた事が、足利頃の隨筆に出て居た事を讀んだ事がある、乃公は、英才ト云ヘルモノハ他ナシ

勉勵ノ力ノ別名ナリ、と云ふ點へ讀み至るごとに、大楠公の釣鐘の話を思ふ、人間が世に處する極意は、一人の力で大釣鐘を動かす動作の間にある、よく考にさつしやい」

折には斯うした比譬も交せて、教訓する事がある、さうしたときは、久子の面の上に云ひ知れぬ歡喜の色が流れる、何物の樂みよりも、何物の滿足よりも、良人が眞面目に小供

の教訓を爲るのを見るのが、彼女には滿足であり愉快であつた。

我兒が小さいきりゝとした身体を父の前に置いて聞き、良人が立志編を讀んで聞かせ、更にそれを嚙み碎いて誨へる、此の間に於ける眞一郎の心は教師で博一は生徒である、久子はそれを見聞きしつゝ、仕立物にいそしみ、また臺所の用をする、親子の心が一致になつ

て、平生の座敷とは異つたように神聖な氣分に爲る、博一の精神は斯うした家庭の教訓に由つてその根本を作られた、それは父の教訓を身に占めて聞く爲めばかりでは無い、良人が人の父として盡す最善の行動に滿足する母の心、それが美しい霞の如く室の中に棚引いて、一層深い感じを與へる、父の教訓と、母の慈愛とが、雨となり露となつて、同時に頭

腦の中樞へ注がれる、父の教訓が石の如く心の上に置かれるのを、くつきりと漆食して微塵も動かぬようにするのは母の胸から溢れ出る慈愛であつた。

その年、久子は五人目の男子を擧げて、紳吾と命じた。

一〇

それまでは一年に一度位づゝ家を轉へて來たのが、松屋町へ移つてからは、こゝに可なりの老舗を作る程になつた、一は眞一郎が新事業に念を絶つた爲めでもあり、小やかな小賣店ではあつても、何うか斯うか一戸を支へて行くだけの利益を收めて行くことが爲きたからである。

店を老舗るのは、家にそれだけの基礎を作

り得るのである、主の心がそれだけ固まつて行くのである。

然し、店の收入と云つても、極めて少い額である、臺所は久子の手で取り賄つて行くが店には手代丁稚も置かねばならない、それに對する手當や仕着せも出さなければならない奥では眞一郎の酒、店では召使への心遣ひ、その間に立つて獨り苦勞の胸を痛めるのは久

子であつた、兎もすると金が足りぬ、良人に相談をしかけても、晩酌の酒が足りなかつた程には身に滲みて聞いて下さらない。

「儉約をする他はない、いつも小供へお話しなさる西國立志編の主意に基づいて、勉强する外は無い、万事に心を用ゐる外はない、良人の酒と、それに伴ふ下物とを儉約する事は爲きぬが、第一は一家の食物、つゝいては

衣服、その他に心を注けて、爲きるだけ費用を省く、その儉約の法をもつて不足を補つて行かねばならぬ」

久子は心に思ひ決めて、總に儉約し、また身体の續く限りを勉め勵んだ、さうしてもまだ足りぬ時は、眞一郎の姉別院せい女が紀州那賀郡野中村に居るのを訪ねて、少しづゝの金を借りて來る、松屋町時代の十數年は、久

子の儉約と、勉強と、せい女の厚意とで家を維持した、その間に於ける久子の行動を見て誰一人感じない者はなかつた、せい女は常に人に向つて、

「久子さんは女の龜鑑や、わし等一家の龜鑑や」と賞賛して居た。

「食物に贅澤をしてはならん」

久子がまづ心に掟して、多くの男兒を育て

た基礎條件の一はこれであつた、眞一郎の晩酌には五六種の下物を付けぬ事はないが、自分と小供とは、晝の膳に菜葉の浸し物か、それの煮たもの、朝と晩とは漬物に極つて居た疎い物でも食へて行くのは御先祖樣のお蔭であり、お父樣のお蔭である、お父樣は御先祖の御名代で在らつしやるから、何のような御無理を被仰つても眞心からお聞き申さねばな

りません、お父樣を惡く思つたり、疎末にする心があると、それは御先祖を惡く思ひ疎末にするに當つて、此上もない不孝になります

お父樣は家の土臺であり、大黑柱で在らつしやる、お父樣があつてこそわし達もある、そのお父樣を輕んずる心があつては、わし等やお前達の手で、家の土臺を毀ち、家の大黑柱を傷けると同樣であるばかりでなく、わしも

お前等も、自分の咽喉を自分で締めると同じ事になります、お父様があつての家、お父様があつての妻子、お父様を大事にするのは、わし等自身を大切にするのに當ります、と久子は口癖の様に心注ける。

されど博一や顧彌太が成長するについては父の擧動が宜しからず目に止まる、母が忙しく苦しい間から調理する五六種の下物の前に

坐つて、晩の六時頃から盃を擧げかけると、十一時まではきつと飲む、そればかりなら爾うでも無いが、時には無理な叱言も云ふ、それが嵩じると打擲する、その擧動を小供心にも不平に感じる。

「眞個にお母さんが可憫さうな、それに反して、お父さんは感心しない」

皆の心に斯うした思ひが芽を吹き初める、

その爲め時には父に對する蔭言を云つたりする。

「お父さんは仕樣がないなあ、毎日お酒ばかり飲んで、お母さんの苦勞が分らんのかなあ」

久子はさうした言を一寸でも聞くと、すぐ面を曇らせた。

「お父さまの蔭口を云つてはなりません、

お父樣は御先祖の御名代であります、山本家の主であります、お父さまを輕蔑るのは、自分を輕蔑ると同じだと云つて居るのがお前方には解りませんか」と强く激しく云ひ懲らす久子が如何な場合にも、良人を良人として奉じ仕へた心、それが幾度か蹉跌した家の根底となり、基礎となつて、微塵も動ぎを見せなかつた、久子の一生には日本婦人の龜鑑とす

べき事が數々ある、その中でも種々の事情から荒み癖んだ良人を奉じて、少しも輕んじ蔑る心の無かつたのは、凡そ女として誰しも爲さねばならぬ事でありながら、誰も爲し得ぬ事を十分に爲し遂げたので、そこに深い意義が籠り、また其處に貴い光線が滿ちる、何處の家でも主を輕んじて、その家の繁昌し發展する筈は無く、何樣婦人でも良人を蔑つて、

その身の立ち行く理は無い、男兒が外へ出て思ふまゝ活動の成きるのは、家庭に於ける權威と光輝とが基本になるのである、取り分け て妻の眞愛と尊敬とが心に添つて、目に見ゐぬ底力が胸に生きる、すると夫が不動の精神となり、不屈の魂となる、日本刀の能く切れるのは、その燒刄の中に製作者の心靈が籠るからである、日本刀の名工が金挺を採つて鞴

の前に坐つたときは、一點の妄念なく、一點の邪心惡心なく、神に齊しい公明正大の心をもつて、依賴者の一生と、その子孫、その一家の安全幸福を祈り籠める、見た處は只皓々として膽を照らし、赫耀として秋水の寒きを覺ゆるばかりで、製造者の心靈を認める事は能きぬが、それを所持して世に出づる時、賴母しい力が何處からともなく現はれて、その

人の守護となると趣きを同じうする、人でも、家でも、事業でも、最も肝要とする點は、その本を固めるにある、本を固めずして永久に幸運を受けることの爲きぬのは云ふまでも無い、人の妻として良人を戴くに、至切の愛情と尊敬とをもつてするは、やがて家の本を固めるのである、本さへ固ければ何時かその上に大厦が建つ、久子が我子を敎育するに、